

「道しるべ（目標）」

齋 藤 高 弘

奥羽大学には学生（東北歯科大学）時代から48年も通っています。教育職を離れて、事務職となって5年目に入りました。

「事務が何もしてくれない」と良く言われます。歯学部（附属病院を除く）単独で規程にある委員会は、教授会、学生部委員会を始め6委員会、歯学部内部の委員会が、教務委員会、歯学部FD委員会を始め16委員会あります。1学年から4学年での開講科目が年間95科目、6学年の臨床総合科目が28科目あります。学生の対応のほかに各委員会等の長の先生方や各科目の多くの先生方が事務室を訪れます。また、会議録、掲示、行事及び新規事業の立案、出張申請書の承認業務、教務・学生関連の出張随伴、保護者への開催通知、入学・卒業・休学・退学手続、印刷作業など実際に机を離れる場面も多々あります。このことを是非ともご理解して頂きたいと思います。

Covid-19の収束に向けてかすかな光も見え始めましたが、まだまだ日常生活に戻るのが程遠い状況です。本学の臨時休業も5月7日から5月31日まで延長されました。この間、感染が疑われた場合、PCR検査を受ける目安が発熱温度、咳、肺炎などの状態と帰国者・接触者相談センターや保健所に連絡とその不明瞭な判断など、それに翻弄されてなかなか検査を受けることが出来ず、無念ながら亡くなられた方も多く、新たな目安が発表となっています。今は宣言の解除に向けた出口戦略が言われ始め、大阪府などは解除に向けた具体的な目標値を設定し、府民はその目標に向かって日々頑張っているようです。

話は変わりますが公開・公表が常識な現在、今の講師・准教授・教授の選考基準の一つに論文数やインパクトファクターなどの最低基準が存在するかどうかは判りません。私が在籍していた当時は、原著論文が、講師で論文10編以上（大学院修了者は4編以上）、准教授で20編以上、教授で30編以上の内部基準があり、筆頭著者が3割以上であることだったように記憶しています。内容や著名な学会誌などの制限はなかったものの、それなりに論文数を増やすことを考えていたと思います。（目標の提示と約束履行＝信頼関係）

その教育・研究は誰のために、何をターゲットとし、どんな効果が見込めるのかという目標が存在するはずで、何事にも戦略あって戦術がある訳です。目標を効果的に達成するための長期的方針（戦略）が示され、方針に向かって効果的に行うための短期的できめ細かい実施方法によって、成果が生み出される訳です。

目標・目的とする結果は、戦術とそれに伴う戦略が成否を決定するのです。漠然とし

た戦略であってもそれを実現するために、効果的な戦術を立案し、実現するための最上の努力をすることが大切です。仮に漠然としたあるいは確固たる戦略に対して漠然とした戦術を立案することが悪い結果を生むことになります。成果が生まれるのであれば良いのですが、結果から判断することは言い訳を正当化することです。戦略（目標・目的）と戦術（実施）を一体化した計画を立てたいものです。

本学会と他学会の棲み分けですが、本学会は研究者デビューの登龍門として、各研究室での研究課題の取組紹介など奥羽大学歯学会の立ち位置も固まっているのではないのでしょうか。研究者の卵を温かく育成・養成し、全国や国際学会で太刀打ちできるようにブラッシュアップのための学会と思っております。

最後に、東北歯科大学第1巻1号（昭和49年12月発行）の発刊に際して、初代学長の村瀬正雄教授が以下の文で締めくくっています。

「人の一生は重き荷を背負いて、はるかなる幸ある里を求め、遠き遠き旅に立つに似たり。あらゆる困難と孤独を克服し、努力してはじめて至る」と。

こんな意味の名言を時の日本を代表する学者藤田 彪が記していると伝えられている。後世の人はこの道を辿り、初めて彼の偉大さを知り、後の世にこの言葉を光として伝えている。

大学学会とは教授から学生に至るまでがともにこの道を辿り、やがて栄光ある東北の光にしなければならないと思う。

東北歯科大学学会の発展を祈りて記す。」

研究過程の苦勞と結果、そして自己満足、次に繋げる活力を持つことは、研究だけでなく、教育にも必要です。教育は研究によって担保され、研究は教育にフィードバックしなければならないのです。

（奥羽大学事務局長）